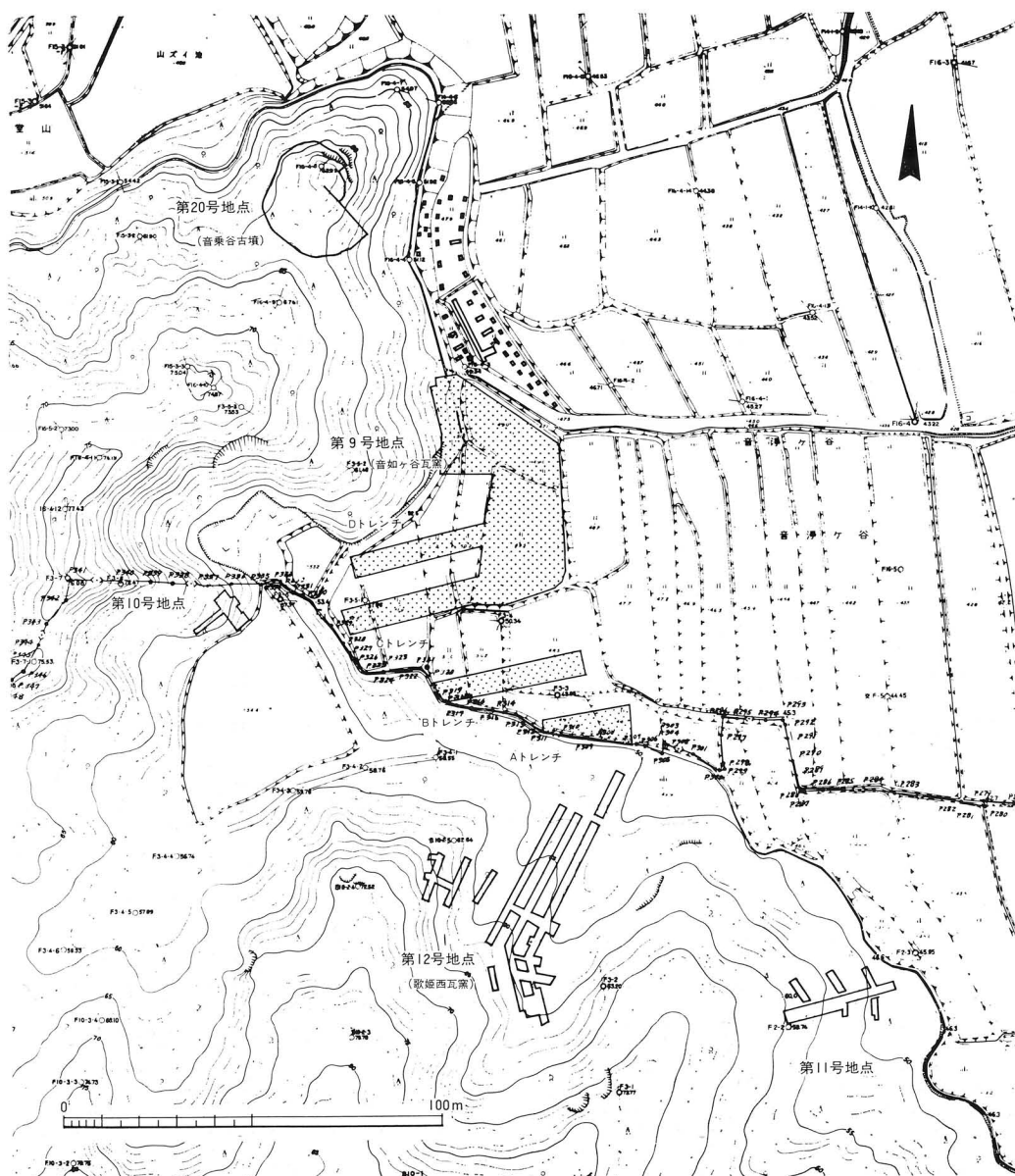


Ⅲ 音如ヶ谷瓦窯（第9号地点）の調査

（一）概 要

地形 調査地は、平城宮の北側によこたわる奈良山丘陵の東側裾部に位置しており、北東方向にのびる支丘陵と南東方向にのびる支丘陵の幹部を形成する扇状に開いた傾斜地となっている。この傾斜地は標高49～52mで段々に水田が設けられており、北方の木津川にいたるまで水田地帯は広がっている。

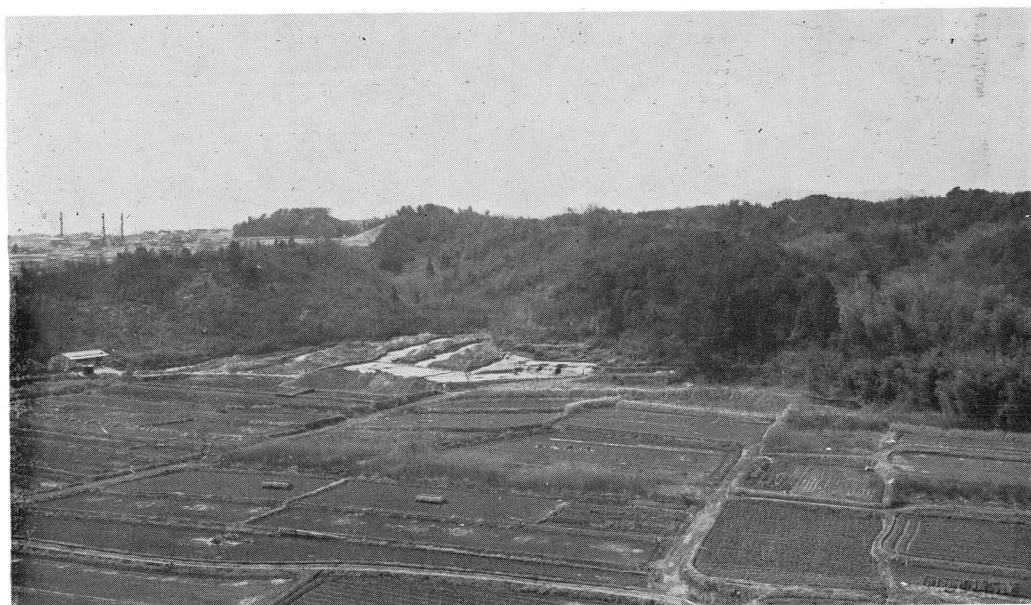


第13図 音如ヶ瓦窯付近地形図（網部分：本年度調査区）

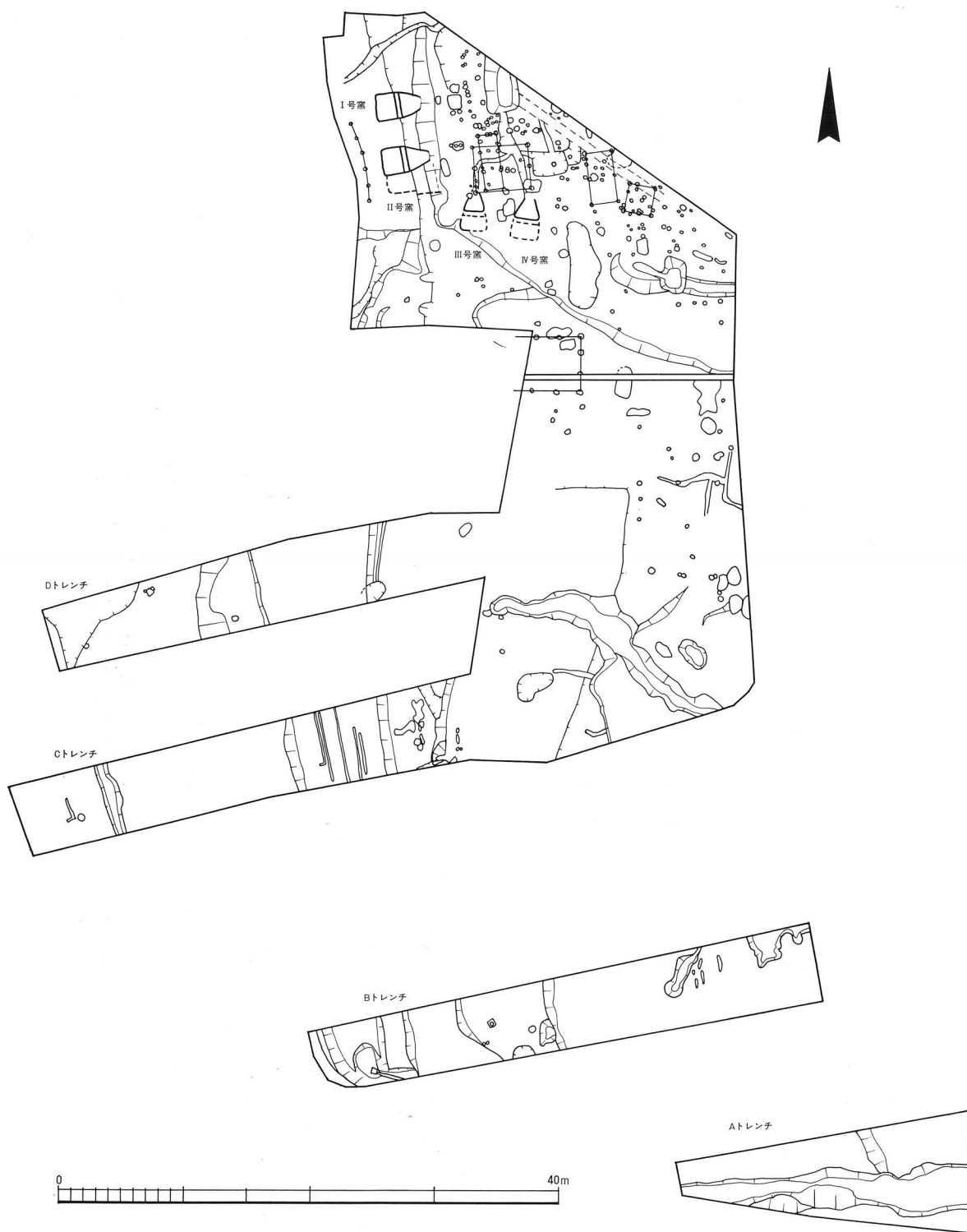
従来の調査 当地域における考古学的調査は、1953年に農業用水路工事に伴って、京都大学梅原末治博士が音如ヶ谷瓦窯1基を発掘したことにはじまる。その後、この音如ヶ谷地区を含めた平城ニュータウン建設計画がおこり、1964年に行った全域にわたる分布調査の結果、この地区でも音如ヶ谷瓦窯・音乗谷古墳をはじめ、数ヶ所の遺物散布地が確認された。1972年には音乗谷古墳の発掘をはじめとして、扇状の傾斜地の南北両側の丘陵に数百のテストピットがあげられ、遺構の確認調査が行われた。その結果、歌姫西瓦窯と名付けた6基の瓦窯と2基の須恵器窯の存在が明らかになった（「奈良山Ⅰ」1973年）。これに引き続いては1973年に音如ヶ谷瓦窯の前面の平坦部の予備調査が行われ、掘立柱跡とともに新たにもう1基の瓦窯が確認された（「奈良山Ⅱ」1974年）。

調査目的 掘立柱跡の確認により、瓦窯前面の水田地帯に工房跡の存在が予想されたことから今回の調査は、窯と工房の両者を一括して把握することを目的とし、調査対象面積を拡大して5,130㎡を設定し、幅6mの東西方向トレンチ4本延べ780㎡と、瓦窯直前の水田二筆1,320㎡、計2,100㎡を発掘した。

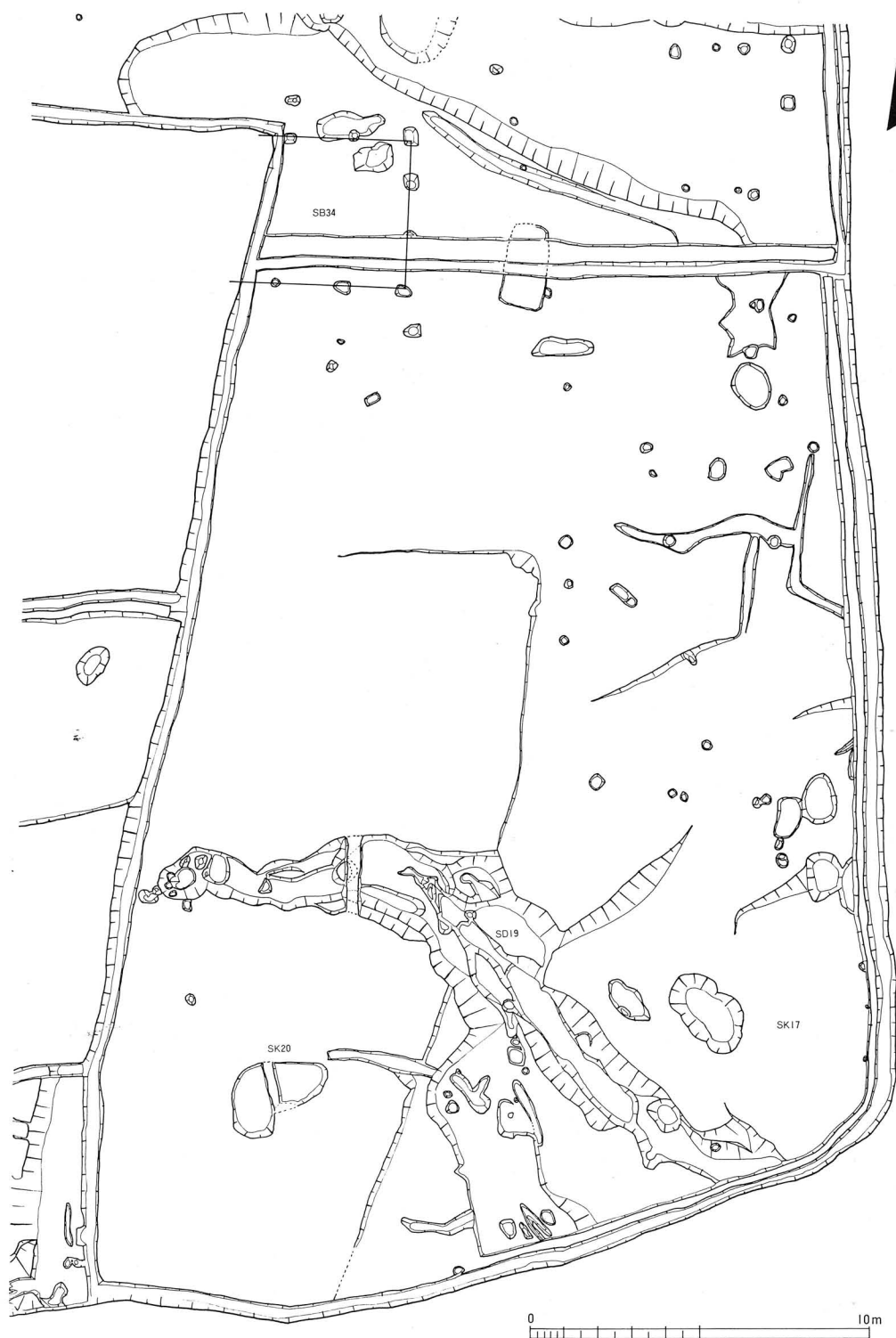
調査結果 発掘区北半部で瓦窯4基とそれに付属する小規模な建物群等を検出し、窯とそれに付属する施設の構成とその変遷が明らかとなった。南半部では、瓦窯と直接関連する遺構はなく、鉄滓を多量に含む土壌（SK20）と溝状遺構（SD19）、埴輪が出土した土壌（SK17）などを検出した。トレンチでは、最南端に設けたAトレンチで、丘陵裾部に沿って設けた溝としがらみを確認した。Bトレンチでは西端部で近世の水溜を検出した。C・Dトレンチでは顕著な遺構は確認できなかった。このように発掘区南半部およびA～Dトレンチでは遺構の性格がなお明らかでなく、まとまりを欠いている。以下では発掘区北半部を主として報告する。



第14図 音如ヶ谷瓦窯遠景



第15図 音如ヶ谷瓦窯遺構配置図



第16図 音如ヶ谷瓦窯遺構図①

(二) 建物遺構

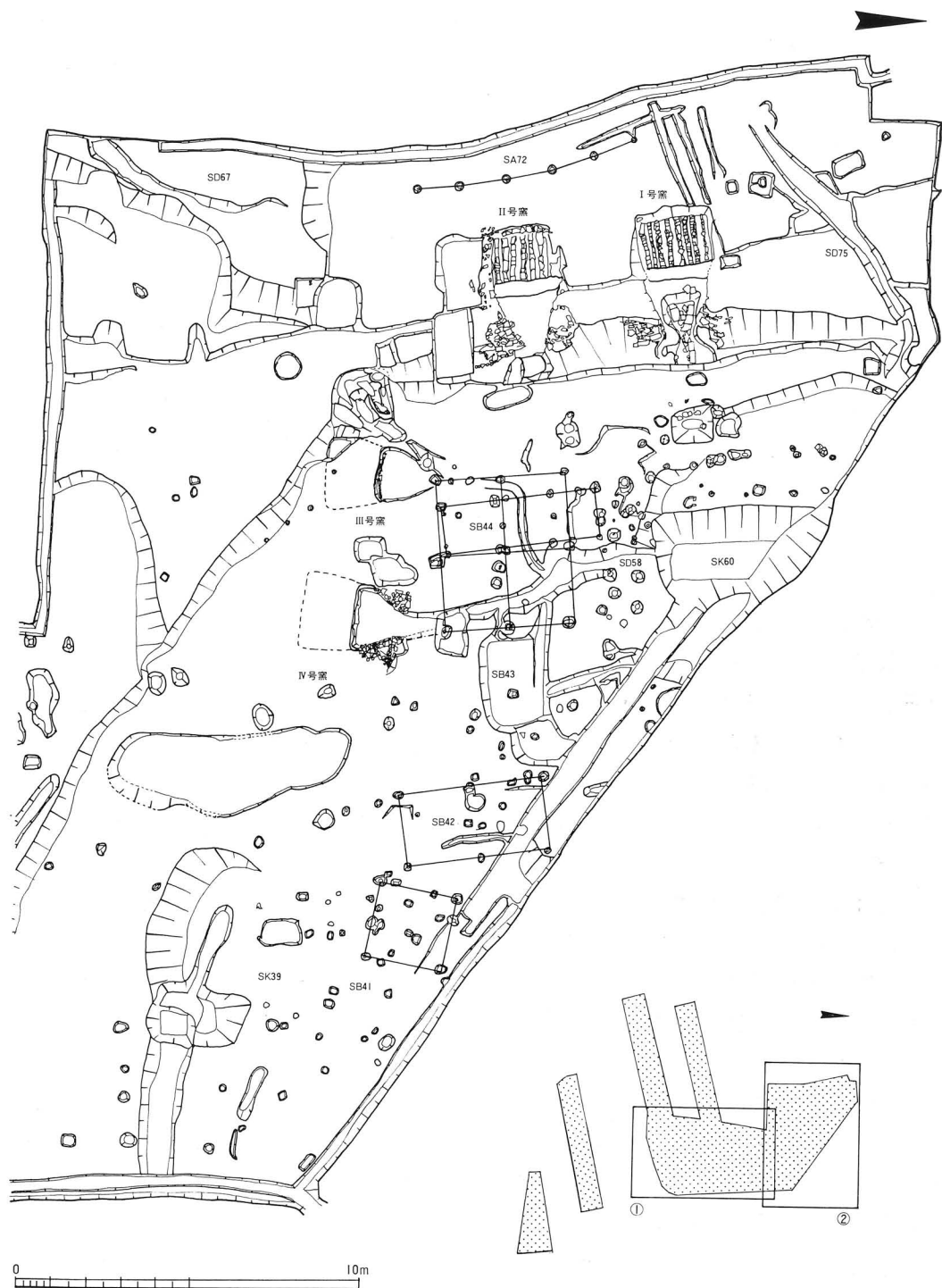
調査地区北半部において多数の小柱穴を検出した。ことにⅠ～Ⅳ号窯の前方部に集中的にみられた。南半部および各トレンチでも若干の小穴を検出したが、いずれも建物としてのまとまりを欠いており明らかではない。北半部では、1973年度にも調査を行っており、幅1mのトレンチ4本を設定して延べ68㎡ほど調査した結果、柱穴19カ所を検出している。この柱穴はいずれも一辺20～40cmほどの円形に近いものであり、そのうちには柱根の残存するものもあり、瓦窯前面地帯における工房跡の存在を推測せしめるものであったが、トレンチ調査でもあり、建物としてのまとまった状況は把握できなかった。

本年度の調査でも、この北半部で、100を越えるほどの小柱穴群を検出したが、建物としてのまとまりを把握できたものは5棟にすぎない。これは、柱穴が小さく残存状況の悪いものが多いためであり、またいずれも小規模で簡略な建物であって、柱筋もきちんと通らないものも多かったろうと考えられる。ここでは柱穴の状況や柱筋からみて確実なものだけを建物としてとり上げたが、実際にはさらに多かったものと思われる。

SB41は方1間の建物で、柱間は約7.5尺ほどである。各柱穴とも径10cmほどの柱根を残している。方位は北で東に振れている。SB42は桁行2間、梁行1間の南北棟建物で、7尺等間であり、西に振れている。SB43は方2間の東西棟・総柱建物で、桁行各柱間7.5尺、梁行各柱間6尺であり、西に振れてはいるがSB41よりは小さい振れである。柱穴には一辺8cmほどの角柱の柱根を残す。SB44は桁行3間、梁行1間の南北棟建物で、5尺等間である。方位はSB42と同一である。柱穴の重複関係から、SB44はSB43の廃絶後に建てられたことがわかる。SA72はⅠ・Ⅱ号窯の奥壁から西へ5～6尺の距離に位置し、4尺等間で弧状に並ぶ柱列であり、窯を覆う施設の一部かと考えられる。SB34は上記遺構とはやや南方に離れて位置する東西棟で、梁行3間・5尺等間で、桁行は3間以上・6尺等間で発掘区外西方にのびる。方位はほぼ国土方眼北に一致する。

以上の建物のうち、SB43・44はⅢ・Ⅳ号窯直前に位置しており、また窯からの排水の溝上にかかっており、Ⅲ・Ⅳ号窯廃絶後に建てられたものである。また柱穴に焼け土が混じっている。SB44はSB43と重複し後の時期であること、SB42とSB44は方位の振れが一致することを合わせ考えて、Ⅲ・Ⅳ号窯廃絶→SB43→SB42・44の時期別変遷が考えられる。この3棟の建物はⅠ・Ⅱ号窯と方位が揃っており、時期的に対応するものとみられる。SB41に関しては年代の決め手に欠くが、前述のように窯と方位を揃えるという考え方が成り立つならば、Ⅲ・Ⅳ号窯に対応すると考えられる。SB34は窯とは位置的に離れており、窯および窯の設けられた地点の地形の影響を受けなくてすむので、方位の振れが少なくてすんだと考えられる。造営の時期については明らかでない。

各建物とも比較的瓦窯に近いところに位置していること、いずれも柱穴・柱間からみて小規模な建物であることから、作業場あるいは資材置場としての機能が考えられよう。工人の住房などは本調査地からさらに北・東方向が可能性が高い。



第17図 音如ヶ谷瓦窯遺構図②

(三) 瓦窯跡

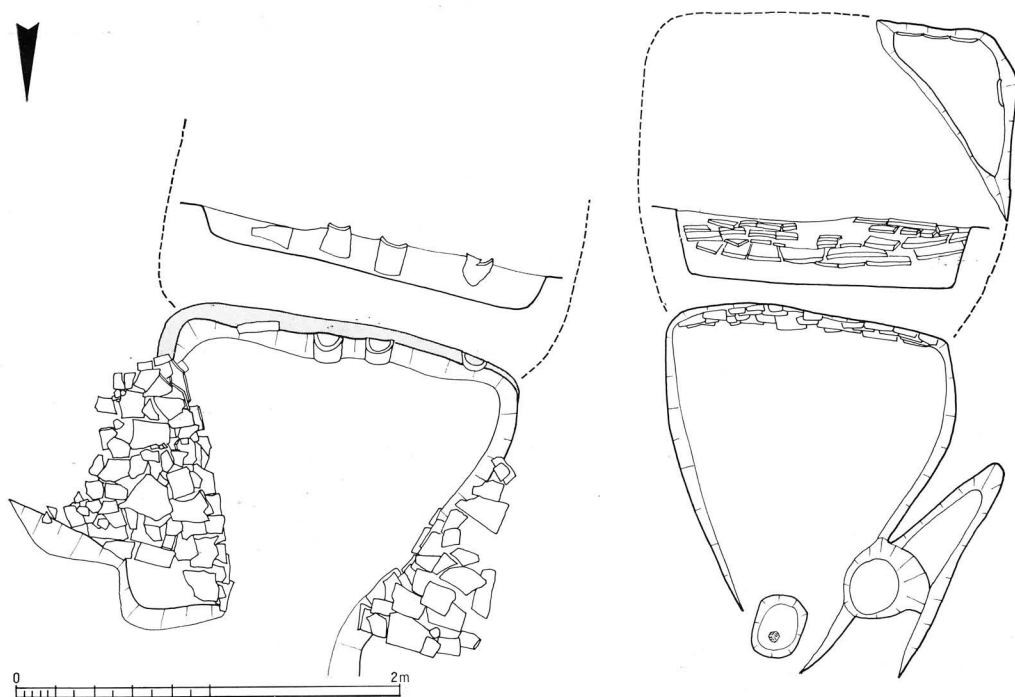
発掘区の北西部で検出した4基の瓦窯跡は、北東方向にのびる奈良山支丘陵の東側裾部に位置する。瓦窯跡は屈曲した裾部に、焚口を東側に開いた2基と北側に開いた2基がL字形に配置されている。いずれもいわゆるロストル式と呼ばれる平窯である。検出順にⅠ～Ⅳ号窯とした。Ⅰ・Ⅱ号窯は比較的良好にその原形を留めていたが、Ⅲ・Ⅳ号窯は斜面が大きく削平されているため、窯跡の一部を残すのみであった。

Ⅰ号窯 1953年に農業用水路工事に伴い、京都大学梅原末治博士によって調査されたものである。再発掘のため一部崩壊していたが、4基のうちで最もよく残っていた。現存長3.9m、焼成室の奥行1.85m、幅2.1m、隔壁の厚さ0.4m、燃烧室の奥行1.65m、最大幅1.9m、焚口の幅0.7mである。

焚口は斜面が一部削平されているため、その構造は不明である。焚口の基底部は0.7mで、前庭部に向かって広がりを見せる。焚口前面の両斜面は、丸平瓦を平積みにして整えている。

燃烧室の平面は逆梯形を呈する。両側壁は同一型式の軒平瓦(6714型式)を迫り持たせながら、アーチ状に構築する。天井部は平瓦を渡ししながらスサ入りの粘土で塞いでいる。天井は調査時に崩壊したが高さ約1mであった。火床の中央部は、溝状に凹み丸平瓦を利用した排水施設が焚口前面まで続いている。埼玉県新久A地点2号瓦窯の排水施設に類似している(坂詰秀一編1971年)。奥壁は瓦を平積みにして隔壁の基底部としている。

燃烧室と焼成室を画する隔壁には分焰孔9口が開く。隔壁の構築方法は分焰柱の観察から次



第18図 第Ⅲ・Ⅳ号窯遺構図



第19图 第I号窯遺構図

のようなことが判明した。分焰柱は玉縁を上にした丸瓦を合わせ、その周囲にスサ入り粘土を巻きつけて仕上げ、柱と柱の上端すなわち玉縁の段に平瓦を差し渡して平積みし、分焰孔の天井を形成する。焼成室は燃焼室より一段高くつくられ、火床の比高差は約0.5mである。火床は8条の分焰牀と分焰孔から続く9条の分焰道からなる。分焰牀は基底に磚を並べ、その上に半截した平瓦を積み上げている。幅約0.15m、火床からの高さは0.2mである。分焰道の幅も約0.15mでほぼ等間隔に配列している。焼成室の壁は火床から約1.35m残っている。左側壁は内傾するが、奥壁、右側壁はやや外傾して立ち上がる。左側壁には瓦積みが見られるが、奥壁と右側壁はスサ入り粘土で仕上げている。両側壁の上端は天井部を構築するためにテラス状となっている。

Ⅱ号窯 I号窯の南約2.5m離れてつくられている。この瓦窯も1973年の予備調査の際に一部確認されている。現存長3.9m、焼成室の奥行1.6m、幅2.4m、隔壁の厚さ0.4m、燃焼室の奥行1.9m、最大幅1.7mである。I号窯よりは一まわり小さい。また、その基底面はI号窯より約0.5mほど高い。

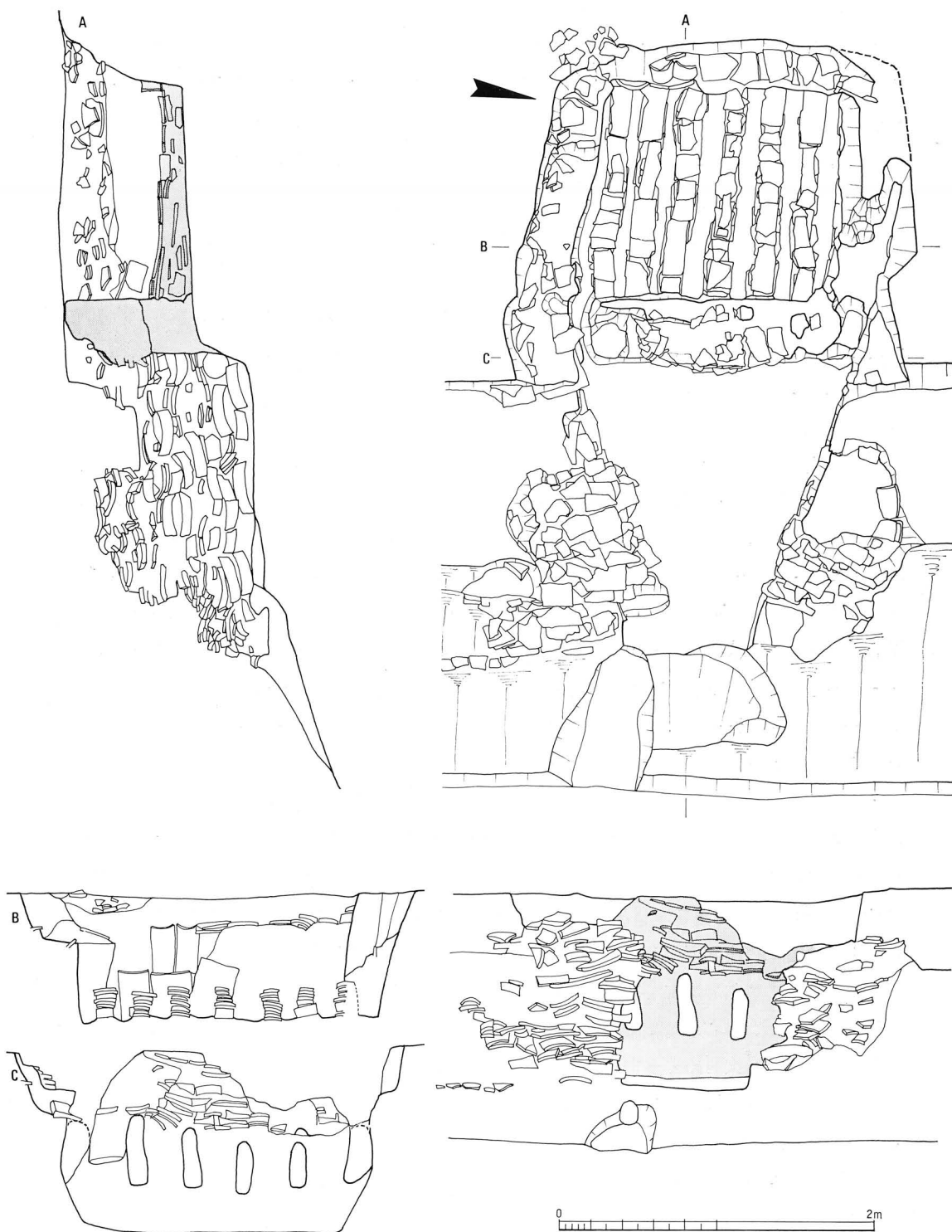
焚口は削平され、両側前面の瓦積みの一部を残すのみである。燃焼室の平面は逆梯形を呈する。側壁にはI号窯と同様に軒瓦を用いて迫り持たせながら構築する。天井部はすでに崩壊しているが、その推定高は約0.8mである。I号窯のような排水施設はないが、焚口に近い左側壁下の火床に孔が開いている。隔壁の構築もI号窯と同様で、一部軒平瓦をもちいて上端部をつくっている。焼成室は7条の分焰牀と8条の分焰道からなる。しかし、右端の分焰牀の上に後補とみられる側壁が設けられており、焼成室の幅は約2.1mに縮められている。分焰牀は基底部に磚を用い、その上に半截平瓦を重ねている。幅は約0.15m、火床からの高さ0.2mである。両側壁はほぼ垂直に立ち上がり、現存高は約0.8mである。奥壁の一部には、下部に平瓦を立てかけ、その上に丸瓦を並べている。壁の上端は天井部を形成するためのテラス状の段をもっている。

Ⅱ号窯に南接して幅1.6mの堀形があり、燃焼室と焼成室の比高差に合わせて、段がもうけられる。埋土は版築状に固められている。発掘時には、Ⅰ・Ⅱ号窯共通の堀形と考えたが北側では堀形が検出されないことから、当初この堀形の位置でⅡ号窯を構築する予定であったものを、北側にずらして作ったために生じた堀形と考えるのが妥当と思われる。

また、Ⅰ・Ⅱ号窯を画するように斜面の側面には排水溝SD67・SD75が検出されている。斜面をつたわってくる雨水を防ぐ目的のものであろう。

Ⅲ号窯 焼成室と燃焼室の一部を検出した。推定全長は約3.2mである。焼成室は南西隅をわずかに残すのみで削平されている。壁は平瓦を立てかけて構築している。燃焼室は長さ1.6m、最大幅1.5mである。奥壁は平瓦を平積みしている。燃焼室の火床に堆積した炭化層中より軒平瓦6716型式が一点出土している。

Ⅳ号窯 燃焼室のみを残している。長さは1.6m、最大幅1.9mである。両側壁には平瓦を平積みしている。奥壁には三個の丸瓦が立てかけてある。うち左側のものは、軒丸瓦の丸瓦部で「五」の刻印をもつ。なおⅢ・Ⅳ号窯は焚口からSK60に通ずる排水溝をもっている。



第20图 第Ⅱ号窯遺構図

(四) 遺物

出土した遺物は、奈良時代の瓦窯跡に伴って出土した土器・瓦類が大半であるが、弥生式土器とそれに伴う有茎石鏃、古墳時代の埴輪・須恵器なども若干まじっている。

1 瓦類

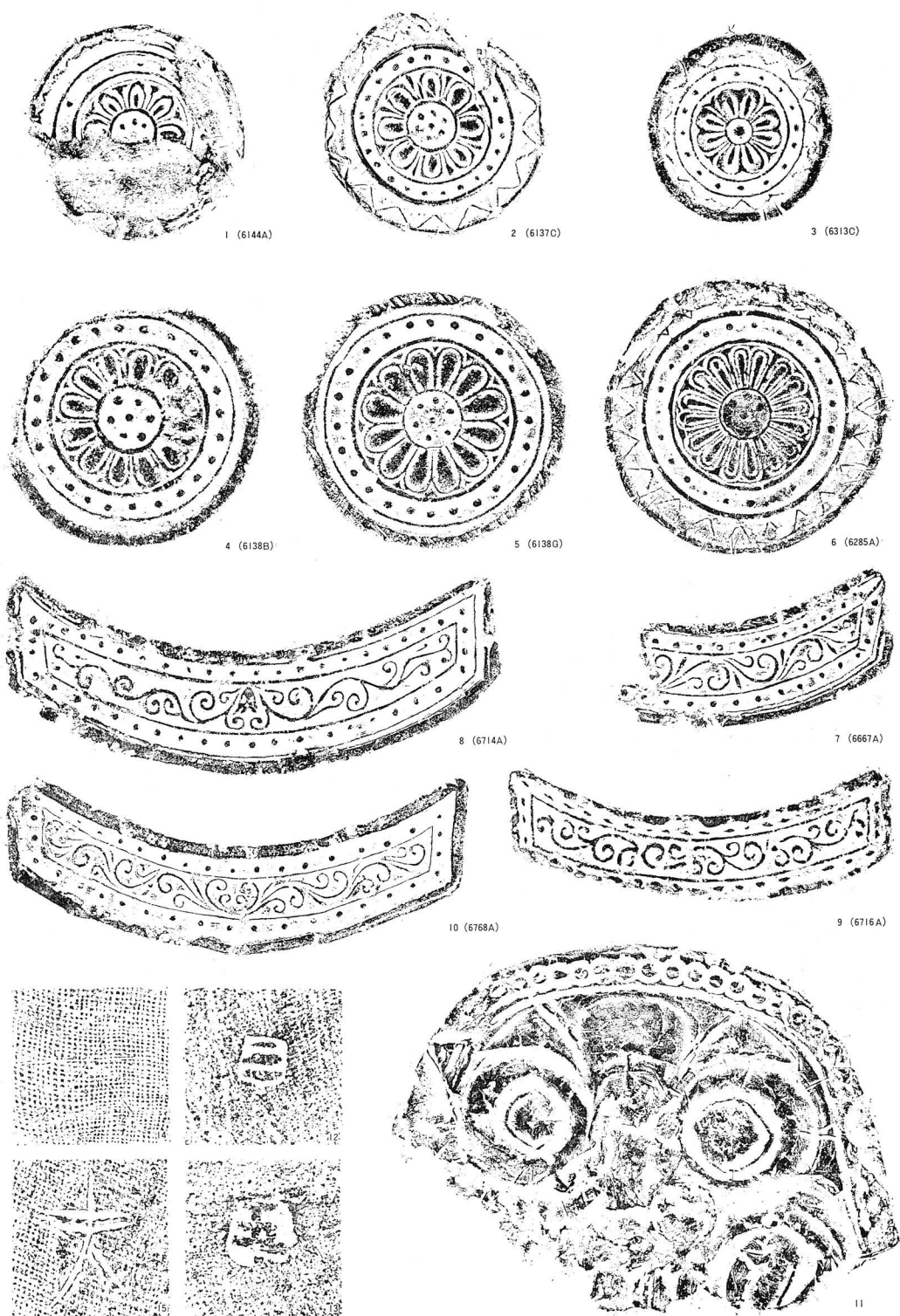
瓦類の多くは発掘区北半部の瓦窯跡とその前庭の平坦地から出土した。とくにⅠ・Ⅱ号窯とSK39・SK60から集中している。Ⅰ・Ⅱ号窯出土のものは、窯壁に使用されたもので、この瓦窯の製品ではない。出土した瓦類には、軒瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・塼などがある。

軒瓦（第21図の1～10） 軒丸瓦6型式29個体・軒平瓦4型式195個体出土した。軒丸瓦に較べて軒平瓦が多量なのは、Ⅰ・Ⅱ号窯の窯壁に使用した軒平瓦6714型式173点が含まれているためである。

1～3は小型の軒丸瓦である。1(6144A)はやや突出した内区に単弁8弁蓮華文を配し、外区内縁には珠文16、外縁には線鋸歯文をめぐらす。中房は弁区より低く、1+6の蓮子をおく。2(6137C)は内区に単弁8弁蓮華文を配し、外区内縁に珠文23、外縁に線鋸歯文16をめぐらす。中房は1+6の蓮子をおく。3(6313C)は内区に複弁4弁蓮華文を配して、外区内縁には珠文16、外縁には線鋸歯文16をめぐらす。中房には半球状の大きな蓮子1をおく。4(6138B)は内区に単弁8弁蓮華文を配し、外区内縁に大きな珠文24、外縁に線鋸歯文をめぐらす。中房には1+6の蓮子をおく。5(6138G)は4と同一型式の単弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に珠文をめぐらす。外縁は素文となる。中房には1+5の蓮子をおく。6(6285A)は内区に界線で囲んだ複弁8弁蓮華文を配し、外区内縁に珠文23、外縁に線鋸歯文22をめぐらす。やや半球状に突出した中房には1+6の蓮子をおく。

7(6667A)は内区に4回反転均整唐草文を配し、外区には上下とも珠文21、脇区に珠文3をめぐらす。顎は段顎である。8(6714A)は内区に蔦状に反転する均整唐草文を配し、花頭を囲む中心葉は上方から巻きこむ。外区には、上外区に20、下外区に18、脇区に4の珠文をめぐらす。顎は曲線顎である。9(6716A)は小型の軒平瓦で、内区に蔦状に反転する均整唐草文を配し、中心飾に十字形の花頭をおき、中心葉は上方から巻き込む。外区には上外区20、下外区18、脇区4の杏仁形珠文をめぐらす。顎は曲線顎である。10(6768A)は内区に4回反転均整唐草文を配し、中心飾は花頭をもたずに二重の中心葉で構成する。外区には上外区16、下外区15、脇区4の珠文をめぐらす。顎は曲線顎である。

鬼面文鬼瓦（第21図の11） SK60から出土したもので、平面形はアーチ状を呈し、寺院でよくみられるどんぐり眼に三角形の眉をもつ鬼面文で、外区の珠文は竹管状に密にめぐらす。下半部は欠損しているが、同範品は平城京左京一条三坊、平城宮跡で出土している。



第21図 出土軒瓦・鬼瓦 (1 : 4) 文字瓦 (1 : 2) 12は1973年度調査出土



第22図 文字瓦 刻印「五」 ヘラ書き「夫」・「大」

この他、「五」の刻印をもつ軒丸瓦の丸瓦部、「大」・「夫」のヘラ書きをもつ平瓦が出土した。予備調査では「三」の刻印をもつ平瓦が出土している（第21図12～15、第22図）。

2 土器類

灰原下層の土壌SK60から多量の土師器と少量の須恵器が出土した。これらの土器は平城宮ⅢのSK820と時期的に併行する時期の一括資料である。この土壌は1973年度の調査でも一部発掘されており、今回の資料と接合するものも多く、完形に近くなったものについては既に報告されたものも再録する。

土師器 （第24図の1～16、第26図の1～11）

土師器には杯A・杯B・杯C・皿A・皿B・蓋A・鉢・高杯・壺・甕等がある。このうち量的には杯A・皿Aが大部分を占めている。

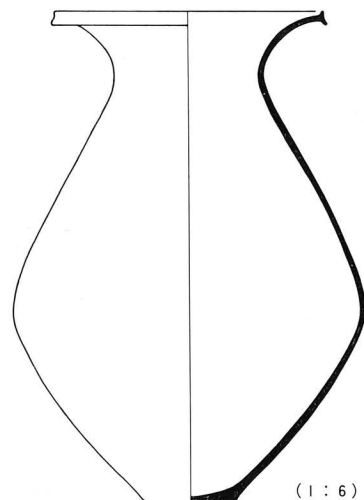
杯A（1・2） 口縁部が内側に巻き込むもの（1）とわずかに外反するもの（2）がある。外面の調整手法には、底部を未調整のまま残すもの（a手法；1）と底部を篋削りするもの（b手法；2）とがある。外面に篋磨きを加えないものがほとんどであるが、口縁外面に篋磨きを加え、内面に螺旋暗文と1段の斜放射暗文をもつものが少数ある。

杯B（11） 大形で底部内面に螺旋暗文・口縁部に斜放射暗文・連弧暗文を施す。口縁部外面は篋削りの後に横方向に篋磨きを施す。

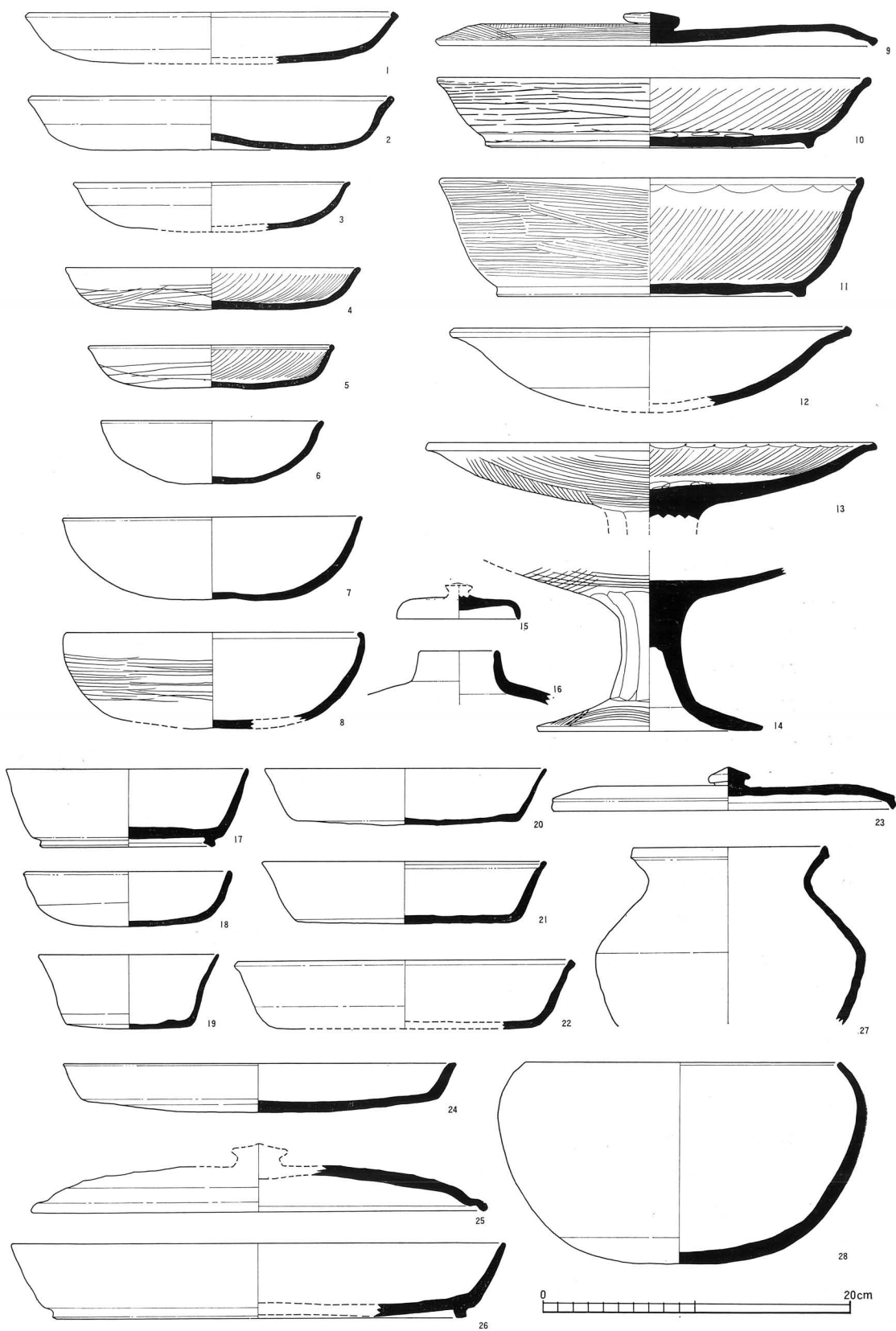
杯C（3・4） 口縁端部が内傾する面をなし、外面の調整には、口縁端部まで篋削りするもの（c手法；4）とa手法によるもの（3）とがある。前者は口縁部外面に篋磨き、内面に螺旋暗文と斜放射暗文が施されている。

皿A（5） 口縁部の巻込みが強く、底部内面に螺旋暗文・口縁部内面に斜放射暗文を施す。a手法で調整し、口縁部外面に篋磨きがある。この他、5と同様な形態で篋磨きのないものと口径20cm前後の大型品も出土している。

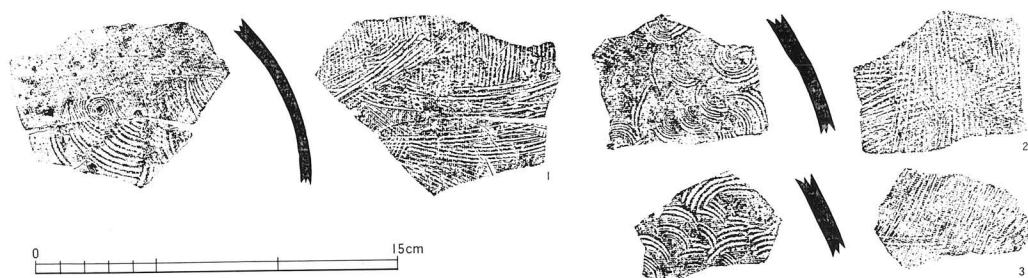
皿B（10） a手法で調整し、口縁外面に篋磨きがある。底部内面に螺旋暗文・口縁部内面に斜放射暗文を施す。



第23図 弥生式土器



第24図 SK60出土土器



第25図 SK60出土土師器甕片

蓋(9・15) 皿Bあるいは杯Bと組む大型の蓋(9)と壺の蓋(15)とがある。前者は器高が低く、頂部に扁平な宝珠形のつまみがつく。頂部はナデ調整の後、つまみを中心に4方向から篋磨きを行なう。頂部内面には螺旋暗文が施されている。壺の蓋(15)は平坦な頂部にやや長い縁部が垂直に付くものでつまみを欠損する。

鉢(6～8・12) 口縁部が内彎し、端部が内側に巻き込むもの(8)と巻き込まず、やや外反するもの(6・7)とがある。いずれもc手法によって調整し、口縁部外面に篋磨きのあるものもある(8)。この他、口縁部が「く」の字形に外反し、b手法で調整された大型品が1点ある(12)。

高杯(13・14) 杯部外面を篋削りの後、脚部を挟んで4方向から篋磨きを施す。内面には螺旋・斜放射・連弧暗文を施す。脚柱部は篋で削って11面に面取りし、裾部外面は篋削り調整ののち、4方向から篋磨きを施す。脚部内面は篋で削って調整する。

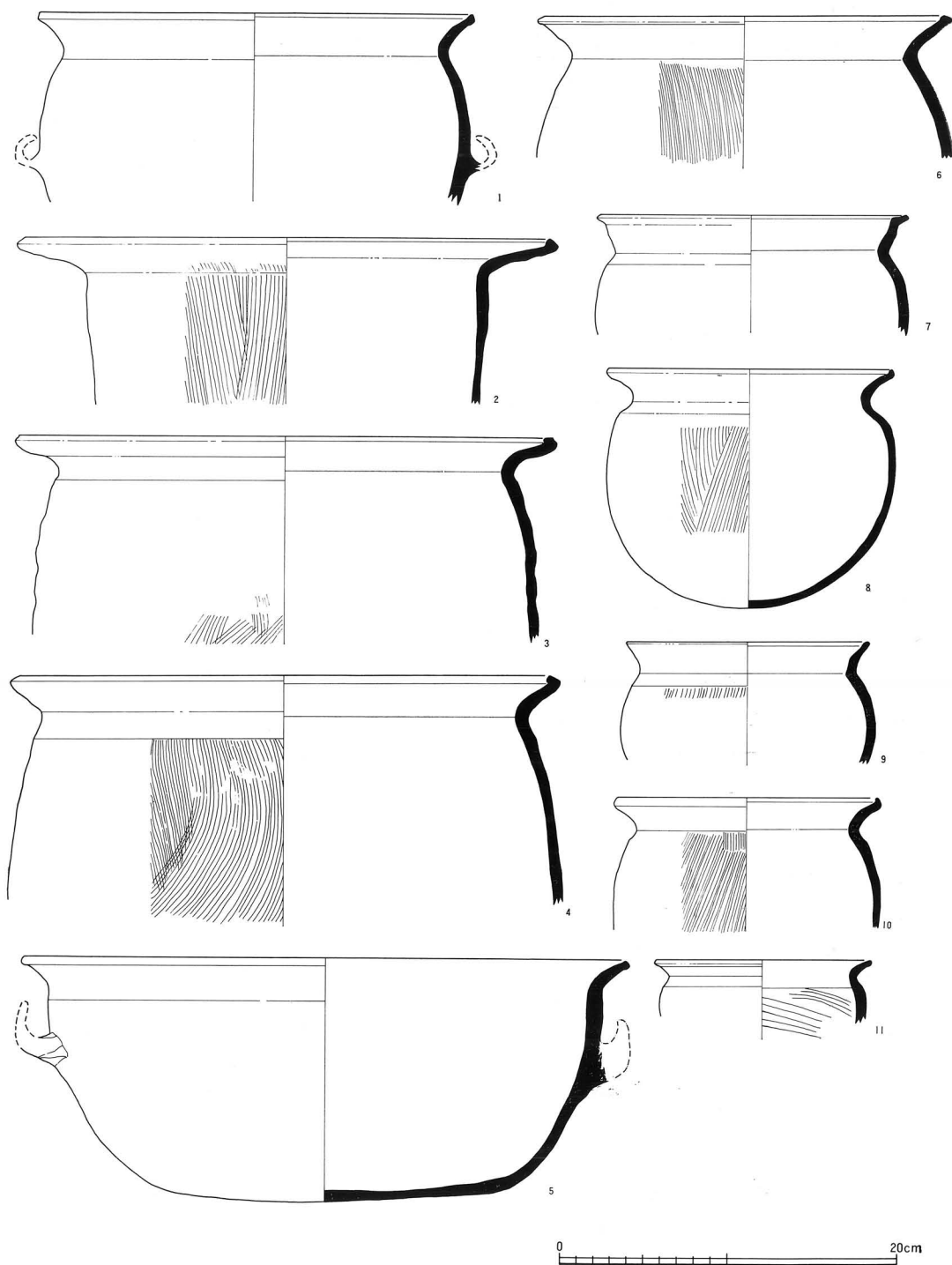
壺(16) 口縁部および体部上端の破片である。口縁部はやや内傾気味に立ち上り、体部は丸みをもつ。口縁部内外を横ナデ調整し、それより下位をナデで調整する。この他、口縁部が非常に短いミニチュアの破片もある。これらはいずれも通常の壺の口縁部と較べると口径が異状に小さく横瓶形になる可能性が高い。

甕類(第26図1～11) 大きさの異なる甕が多量に出土した。大型品には、長胴形の体部に大きく外反する口縁部からなる甕C(2～4)と球形に近い体部と外反する口縁部からなる甕A(6)と甕Aに近い形態で体部に側面三角形の把手が付く甕B(1)がある。小型品はすべて甕Aで、口縁端部が内側に折り返されるもの(8～10)と折り返しのないもの(11)と口縁部がほぼ真直ぐに立ち上がり、端部で外方に折り返すもの(7)がある。体部内面をハケメ、体部外面を篋削りののちナデで仕上げるものがほとんどであるが、1・7・8は体部外面を篋で削り、11は内面にハケメを施す。この他、全体の形態は不明であるが、体部内面に青海波の当て板痕跡をもつ甕の破片が少量出土している(第25図の1～3)。

鍋(5) 平底に近い半球形の体部に外反する口縁部の付くもので、体部に側面三角形の把手が付く。把手は内面から穿孔した穴に粘土を差し込んで成形している。体部外面を篋削り、口縁部外面を横ナデで調整する。

須恵器 (第24図の17～28)

須恵器には杯A・杯C・杯B・皿A・皿B・椀・蓋A・鉢A・壺・甕・盤等がある。



第26図 SK60出土土師器甕

杯A (18・20) 平らな底部と外傾する口縁からなる(20)と底部と口縁部の境が明瞭でなく、内彎気味に外傾する(18)がある。いずれも底部外面を篋切りののちナデ調整する。

杯C (21・22) 土師器の杯Aに近い形態を呈し、端部内面がわずかにくぼむもの(21)と口縁端部が外反するもの(22)とがある。底部外面を篋で削るもの(22)と篋切りのまま未調整のもの(21)とがある。

杯B (17) 高台が低く、下端面が内傾する凹面をなすものである。底部内面をナデ・口縁部縁部内外面をロクロナデで調整する。

椀A (19) 平らな底部と外傾する長い口縁部からなり、口縁部はなかほどで大きく外反する。底部外面をロクロ回転を利用した篋削りで調整する。

皿C (24) 平らな底部とわずかに内彎気味に外傾する口縁部からなり、口縁端部は面をなし、端面はほぼ水平である。底部外面を篋削りののちロクロナデで調整する。

皿B (26) 断面4角形でわずかに外方に張り出す高台の付くもので、底部外面を篋削り調整する。

蓋 (23・25) 杯Bの蓋(23)と皿Bの蓋(25)とがある。いずれも頂部を縁部近くまで篋で削って調整する。

鉢A (28) 丸底の鉄鉢形の土器で口縁端部は丸い。外面は全体を篋削りで調整し、そのうち体部中ほどより上には篋磨きを施している。

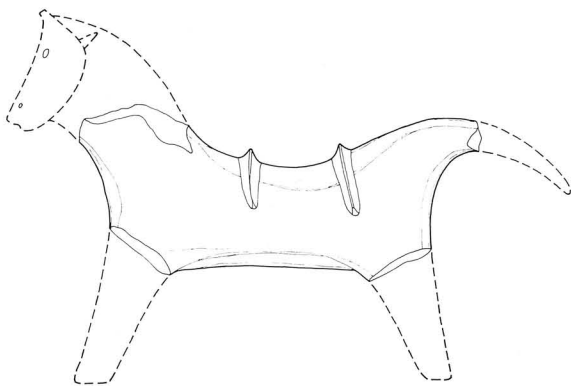
壺 (27) ゆるく外傾する口縁部と胴部の中ほどに稜をもつ壺で、外面に自然釉が付く。ロクロ水挽きによって成形している。

その他の遺物

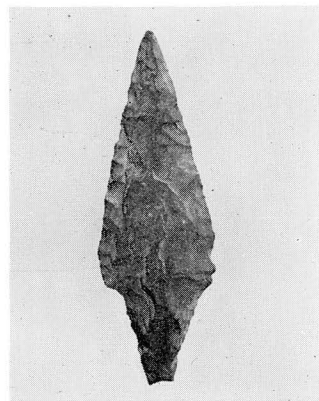
土馬 (第27図) Cトレンチ包含層から 胴部の破片が1点出土した。 たてがみをつまみ出し、尾は垂れ下がっている。背には鞍が表現されており、奈良時代初期の様式を示している。

製塩土器 SK60及び包含層から、小片ではあるが厚手の製塩土器が出土している。

弥生式土器 (第23図) SB34の南方にある 地山面に掘り込んだ小穴から 弥生式土器の壺1個体分が出土した。なおこの時代の遺物としては、Bトレンチから安山岩製の有茎石鏃 (第28図) が出土している。大型品で全長8.4cm、最大幅2.5cm、最大厚0.8cmである。



第27図 Cトレンチ出土土馬 (1:3)



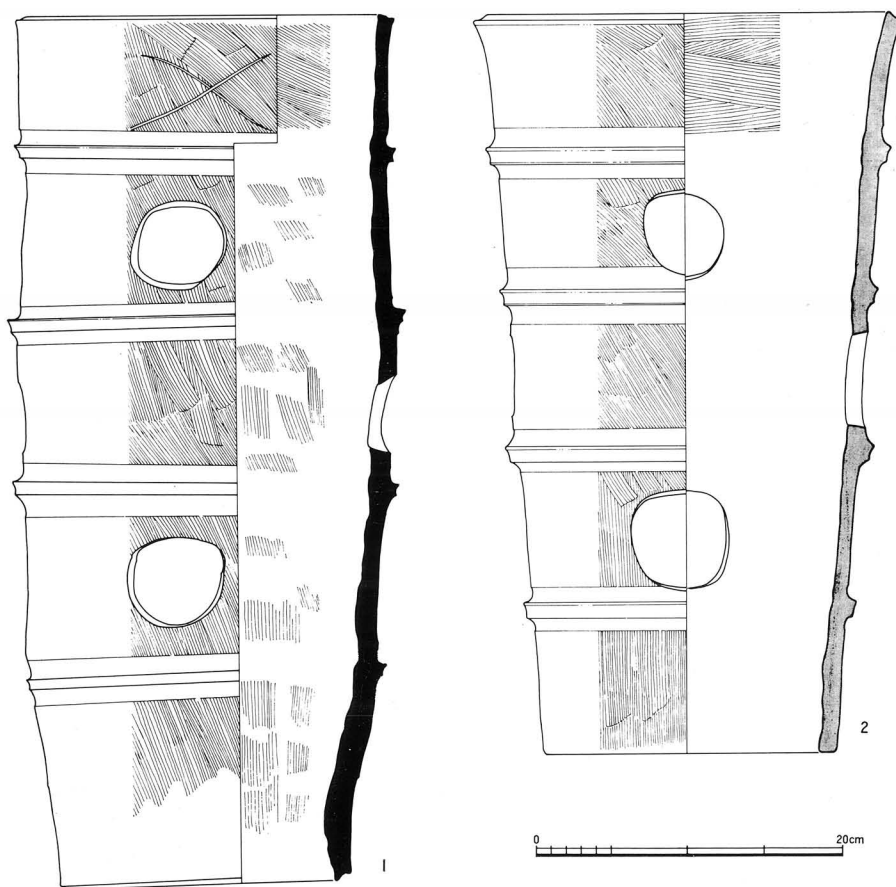
第28図 Bトレンチ出土石鏃

3 埴輪

土壙SK17からはほぼ完形の円筒埴輪が2点出土した。いずれも底径より口径が大きく、底部から口縁部にかけて直線的にひろがるもので、胴部に4条の突帯がめぐる。下から第2段と第4段には方向をそろえて、第3段にはこれらと直交する方向で、円形の透し孔があく。口縁はわずかに外反し、幅広い端面は外傾し、端面中央が凹む。底部には内端面の突出するものと、幅広い面をなすものがあり、前者では端面が水平であるのに対し、後者では突出に高位差があり、底面は水平ではない。

第29図の1は、青灰色硬質で、外面を左上がり斜ハケメ、内面を縦方向ないし左上がり斜ハケメで調整し、外面の下端部をヘラで削っている。内面のハケメは後のなでによりわずかに残る程度であり、突帯の裏面には横方向のナデがめぐっている。口縁部外面に「×」状の刻文がある。底部下端は焼きが悪く、黄灰色軟質である。口径25cm、底径18cm、高さ58cm。

2は黄褐色軟質のもので、外面を縦方向ないし左上がり斜ハケメで調整する。内面は口縁部のみ横方向のハケメで調整し、以下はていねいになでる。口径28cm、底径19cm、高さ49cm。



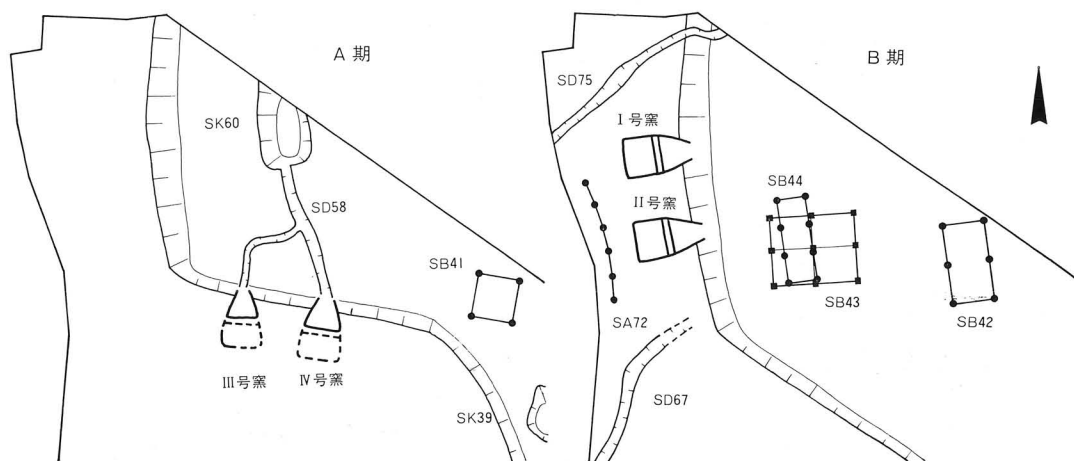
第29図 SK17出土埴輪

(五) 結 語

検出した主要遺構は瓦窯4基・建物5棟などいずれも調査地北半部に集中しており、A・Bの2時期に区分できる。Ⅰ・Ⅱ号窯とⅢ・Ⅳ号窯では既述の如く窯壁の瓦の積み方や排水処理方法に相異があることから時期を異にすることがわかり、Ⅲ・Ⅳ号窯をA期、Ⅰ・Ⅱ号窯をB期と考えた。Ⅲ・Ⅳ号窯から続く土壌SK60からはⅠ・Ⅱ号窯の窯壁に使用している軒平瓦(6714A)の撥物と共に、それよりやや古い土器や軒瓦が出土している。このことからA期のⅢ・Ⅳ号窯で生産された瓦がB期のⅠ・Ⅱ号窯の構築に用いられたと考えられる。したがってA期は軒平瓦(6714A)の天平宝字頃、B期はA期に引き続いての時期と考えられる。

建物はいずれも小規模で、薪を置く納屋とか火入れ時の番小屋といった簡単な施設と考えられる。SB43・44はA期の窯の焚口直前に位置しているため、B期に伴うもので建て替えがあったと考えられる。したがってこれらと方位を同じく西偏するSB42はB期、逆に東偏しているSB41はA期と推定した。

次に軒瓦について考えてみる。軒丸瓦1(6144A)・3(6313A)・6(6285A)、軒平瓦7(6667A)は平城宮Ⅱ期(養老5～天平17年)からⅢ期(天平17～天平勝宝年間)に属し、音如ヶ谷瓦窯に隣接する歌姫西瓦窯の製品であることが1973年度調査で判明している。軒丸瓦2(6137C)・4(6138B)・5(6138G)、軒平瓦8(6714A)・9(6716A)・10(6768A)はⅣ期(天平宝字元年～神護景雲年間)に属し、音如ヶ谷瓦窯の製品とみることができる。先の概報(「奈良山Ⅱ」1974)で述べたように法華寺阿弥陀浄土院の造営に関連する瓦と考えられ、作金堂所解案に記載の「一貫百文瓦窯二烟作工七十九人功人別十四文」(大日本古文書16巻279～294頁)と、2基づつの瓦窯の変遷と符合するように思われる。またⅣ期の瓦のうち軒平瓦(6714A)は歌姫瓦窯からも出土することが近年判明した。音如ヶ谷瓦窯出土の軒瓦が歌姫瓦窯や歌姫西瓦窯出土瓦と同範関係にあることは、奈良山丘陵に点在する瓦窯群の変遷や瓦工集団の移動を考える上で重要な問題を提起している。なお、音如ヶ谷瓦窯でみられるロストル式平窯がどのような契機で出現するかという問題も残された課題といえよう。



第30図 音如ヶ谷瓦窯遺構変遷図